

◎都の友へ

岩代須賀
川本町

服部貞子

またしても田舎の自慢聞え上げ候。

夏も眞盛りのきのふけふ、朝に星を戴いて静かに運ぶ杉の庭下駄、又なう輕うて心地よう候、よべ數へ置きし朝顔の、見事はづれて、垣根の外に僅に二つ三つ。憎けれど、うれしう候。黒く光れる此の顔洗ふべく、溢るゝ井水に近より候へば、可愛の小雀三羽、しきりに何をかついばみ居り候。見れば、きのふ過ちてこぼしたる米幾粒、さてもよき功德になり候ものかな。うがひしつゝ、我が草屋根を見やり候へば、此の間の雨にてや、いたく草々延びて候。さればか、低き家も、何となう高き心地いたされ候よ。

父が丹誠の里芋は、きのふ初ものいたし候。コロ／＼とまろび落つる巻葉の白玉、惜しき心地いたされ候て、いたくもくぼみたる硯に受けて、先づ今日の日記のはじめに、二日、晴れと書き入れ申して候。新しき手拭を姉様かぶり、今日は胡瓜もぎいたし候。こは私の丹誠に候へば、味は二重もの、一籠おくりまゐらせ候。風呂たいて、畑の父君母君待つるを、小屋なる牛の鼻なでながら、そゞろ眺むる紅の雲、あすもまた上天氣にて候。眞盛りなる卯の花垣のあたりかしましと見れば、蟬取博士の弟のかへりにて候。鳥もねぐらに、父

母おかへり、嬉しきは母の右手なる赤き／＼ほうづきの一もとに候。にぎり池にて洗う父君の鍬、夕日に映えて、蛙も歌ひ出で候。やがて楽しき夕げのむしろ、そはいつも、弟の蟬の話にて、にぎやかに候。風鈴の音に耳うちすまして揉みまゐらす父君の御肩、いびきは早も高う候。かくて我れ等が楽しき一日はつくるにて候。これ自慢の價あるものと存じ候まゝ、螢の光りにて一筆ものし候。かしこ

【入力者注】 底本には傍点等が付されていますが、煩雑を避けるため省きました。

底本…「女子文壇」明治三十八(1905)年第壹卷第九號

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年三月四日

修正…令和六年四月十一日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)